発達勉強会　瀬戸山先生　R.6.1.20

主体性について

子どもがたちの生きる力を育む教育

・「生きる力」…「自分もやってみたい」と「主体的に」学習する意欲を高めること、達成感、自己肯定感の醸成を図ることが重要である

・主体的に学習したり、社会参加を行ったりするためには、必ず、子どもたちの周囲にいる他者の存在や他者の豊かな人間関係の形成を考える必要がある。そのためには、自分から手助けを求めて物事に向かっていく必要がある

主体的であるとは

「子どもが主体的」にみえるのはどんなときか

・自分を押し出す場面はネガティブな場面も含み、やりたいことを主張すること

・こうするけれど、この願いもかなえてほしい　いやだなど

・やらないという選択をしている、待っているという選択をしているとき　　など

1人ひとりのこどもたちが「主体的に」学習することとは
指導者や子どもたち同士が相互に意思表示しを尊重しあうことが基盤

学習時の子どものきめ細やかな意思表示の読み取りや
指導者とのコミュニケーションが重要

社会的相互作用

・子どもたちが状況に対して意味づけを行い、他者の意味づけを解釈し、それに対して反応する事象

・他者の行為を模倣し、実際に自己の身体を使って体験してみることで、他者の心を理解することにつながる

・乳幼児の動機付けの発達にとって応答的反応が重要

・幼児期においては、仲間との関係が子どもの有能感に与える影響が大きい、有能感が好奇心を高める

物と行為を結び付けて意図理解を学んでいき、褒められることでやってみたいにつながる
子どもが主体的に学習し、他者との豊かな人間関係に繋がっていくか
子どもたちの身体の状況や生活年齢も加味しながら、その内在する能力をいかに引き出していけるか

遊びの場面で発揮される

遊びとは

① 自発性（自分からすること）

② 自己完結性（満足するまですること）

③ 自己報酬制（「楽しい」という自分へのご褒美を与えること）

遊びを通して、様々な感情や時空間を体験し、種々の能力を発揮する

支援者による子どもの捉え方や課題設定や関わり方などが大きく影響し、
関わりを通して、次第にやりたいこと（方向）が明らかになり、見通しを持って遊びを展開する

・体を動かして遊ぶことで体力・運動能力が向上する屋⇒姿勢保持、体幹などの調整する能力が身につく
・たくさんの友だちと遊ぶことでコミュニケーション能力や協調性や社会性を養う⇒人はどのように助け合い、協調していくのか知る
・「遊び」がうまくいくようにするために、創造性を働かせたり、試行錯誤したり、妥協したりする中で、様々な状況に対して柔軟に対応できるようになる⇒再挑戦、うまくいかないときの対処ができる
・社会生活や学習においてとても大切な、自己抑制力を獲得する

好きなもの、興味あるものは難しくてもやろうとするもの

子どもの興味関心を支え「面白い」「楽しい」といった快の感情、「もっともっとやりたい」と思い、人・物事象などに主体的に関わりサポートしていくことが自発性につながる

子どもが安心できる環境を整える

わからないは不安を引き起こす要素

⇒「これならわかる」といったような安心感を持てるような環境設定をする

・対人指向性（仲間との遊びを好むか、一人で遊ぶのを好むか）

時には仲間との関係が緊張やストレスを感じる場合もある

・遊びの指向性（どういう遊びを好むか）

繰り返し同じ遊びをする。一定のパターンを繰り返すことが楽しい。心地よい⇒情動行動、その子の背景をみることも大切

「遊びの指向性」と「対人指向性」

創造的、変化に富む遊びが好きだけれど、仲間との関係が浮動的、対人不安がある

…対人不安があることで「創造的、変化に富む遊び」を本当はやりたいのにできない⇒比較的小さなグループで単純なごっこ遊びを一緒にできるように支援していき、徐々により創造的、変化に富むごっこ遊び

や砂遊びに誘っていく

パターン的、繰り返しの遊びを好み、仲間との関係を好む
…比較的単純なルールで大人数でする遊び
⇒興奮したり、ふざけたりする場合、興奮しすぎる手前でクールダウンするように支援　玉入れ、しっぽとり、だるまさんがころんだなど

パターン的、繰り返しの遊びを好む、仲間との関係が浮動的、対人不安
①本当に「パターン的な遊び」だけが好きなのか
②ほかの遊びの楽しさを知らないから「パターン的遊び」だけをしようとするのか
⇒安定的な環境の中で、新しい遊びを経験して、それでも「パターン的な遊び」を好むのならば、好みとして尊重し、その遊びを保障する

対人不安の傾向が強い子どもの遊び
安心できる環境を整える、遊びを紹介する、遊びをサポートする、子どもの遊びをともに喜ぶ
支援者との間に「この人は安心できる」「この人のことをみていると、面白いことがある」という関係

子どもの動きをよく見て、声をきくこと、話に耳を傾けること、子どもの気持ちを受け止めること
支援者は、適切な発達最近接領域を見極め、見通しを持った支援の提供をしながら、試行錯誤していき、個々の発達特性に応じた課題設定をすることが大切